

付録 果菜園荒地年報二〇一三

わたしの暮らして、果菜園の園丁という役回りが重要な位置を占めている。その作務にまつわるつぶやきが、検索エンジンのほかには覗いてみる人もいないこのホームページに登場するのだが、一年の終わる季節になって、園丁として苦労話をしてみたい気分である。そういう閑話は、ほかの雑記と同じく、当人を別にすればなんの価値ももたないけれども、この「器水」を容れた皮袋が二〇一三年をどう暮らしたか、痕跡を示すことにはなるだろう。仮想的な読者である孫たちがいつか読んでくれるかもしれない。

野菜は、五月の乾燥の時期に植えて根づきに気をもむのを避けるために、スイカ・メロン・キュウリ・トマト・カボチャ・トウモロコシを早めに植えた。しかも、黒マルチで土をおおうという念の入れかた。ただし、その後の水やりの苦労が避けられたわけではない。作戦のかがあつて、十株のトウモロコシはまずまずの出来だった。うれしかったのは、一株のメロンから、大きくておいしいのが六個取れたあとに、もう一度やはり十分の大きさのうらなりが七個取れたことである。残念ながらうらなりの甘みは足りなかった。追肥

がいきとどかなかったせいかもしれない。七月上旬に梅雨が明けて三十日近く雨が降らず干天が続いたことは、すべての果菜の成長に影響した。それぞれ二株のスイカとカボチャは、肥料の配分にまずいところがあったのか、八月下旬になってもツルを広げることがやめず、つけた実はわずか。NHKの「野菜の時間」によれば、スイカは人の手で受粉を助けなければいけないらしい。ほかにも原因があるのだろう。それでも、八月の中旬を過ぎて大きさは十分のスイカを二つ、孫たちに食べさせることができた。二株のキュウリは順調で食卓を助けたのに、二株のトマトはあまりかんばしくなかった。遊びに植えてみたイチゴは、鳥や虫たちの接待に使い、自分の口に入ったのは一粒。

少し間を置いて、ナス・オクラ・ピーマン・ニガウリなども二、四株植えた。こちらの土を黒マルチでおおうゆとりがない。早と記録的な暑さのせいか、根気よく水やりをしたのにナスは不作であった。オクラとニガウリはかなり収穫できたが、ピーマンやシントウはあまり努力に報いてくれなかった。それぞれ耐性と生き方が違う。サツマイモのツルを埋めてからの水やりも苦勞の種である。今年はずまく根づいてよく茂ったと思っていたら、あの熱気である。しぶといはずのかれらも、いちばん成長すべき時期に葉の数を減らすという憂き目に泣く。しかも、九月も雨の降らない日が続いて、元気はなかなか回復しなかった。ともかく秋植えの玉ねぎのために十月の下旬に掘ったら、ある程度の大きさにはな

っていたが、隣の畑の人は、今頃になって葉が茂り出したと言つて、十一月中旬まで収穫を遅らせた。

ネギ・サニーレタス・ホウレンソウなどの葉物野菜たちのことも名を出しておかなければ不公平だろう。かれらはまずまず健闘した。アカジソとアオジソもその存在を主張する。こちらは、何もしなくても毎年芽を出して育つ忠義者である。こう数え上げると、たくさん野菜を少しずつ育てている。

果樹については第六話で少し触れた。両親の植えたナシが実を結ばないのは、相方の木がないせいだと知ったので、六年ぐらい前に別の品種の苗木を植えたのである。今年そちらが花をつけたら、老木の方が三十年ぶりに初めて五個の実を結ぶという奇跡を演じた。若木も二つ実をつけて祝福。この喜びを味わうのには学習すべきことがあった。ナシの葉がいつも枯れるのが赤星病という病気だと知ったのは去年のこと。冬場イブキ類の木で越冬した細菌が、春になって強い風に乗ってナシの木まで飛んできて雨でも降れば葉に広がるというのだ。自然界にはすごいやつがいるものだ。ナシの産地では広い範囲でイブキ類を植えるのが御法度だそうだ。だが、気まぐれにナシを植えた者がこの禁令を施行するわけにいかない。当のわが家が禁令を犯している。今年、春に強い風が吹く度に四度も殺

菌剤を散布したので、文字通り成果が上がったのである。

ナシの苗木を植えたとき、簡単に考えてリングゴも二株植えた。リングゴにも赤星病がつくことがあるらしいが、幸いわが荒地のリングゴにはつかない。ところが、帰省するまで手入れのいき届かなかったあいだにずいぶんの目にあっていた。カミキリムシが食い入るし、芯が枯れる病気もついて、満身創痍である。一つの方はとくに被害が大きくて木は大きくなれていない。被害の小さい方も、知識のない園丁が庭木のように剪定して枝が茂りすぎている。それでも今年、両方の木が花を咲かせた。苦勞している者に、淡い赤みを帯びたその花の麗しいこと。花々を撫でて、受粉させた。すると、ナシの奇跡を見たリングゴも発奮して、やがて小さな実を結んだ。ところで、大きい木の方の実の数は、ちょこちよこつと受粉させた分よりもはるかに多い。ほとんど気づくこともなかったが、野生の小さなミツバチや昆虫が園丁よりも大きな仕事をしたのである。ナシの方も同様である。考えてみれば、雄花と雌花のあるスイカもそうなのだ。自然の配慮に園丁は感じ入る。それなのにヒトは、リングゴやナシにとつてうれしいことではないかもしれない摘果という身勝手なことをする。それも袋かけも手間のかかる作業で、果物生産者の苦勞を身をもって知る。

じつは、両親はナシのほかにスモモも一株植えていたが、こちらは、近所にスモモがあるので実をつけたことがあったのか、枝の下に実生の若木が一本生えている。そこで、い

なか暮らしを始める頃、大きくなりすぎた木を大胆に刈りこみ、別の苗木も植えた。今年
は老木がかなり花を咲かせ、植えた若木も少し花をつけて、期待を抱かせたが実を結ばな
かった。園丁のもくろみは、必ずしも思い通りには実現しない。果樹を育てるには気を長
くもって対話する必要があるのだ。こちらの精神の在りようが矯正される。

リンゴが生ったうれしさのあまり、園丁もつれあひもまだ青リンゴのうちに何度も試食
して、「うん、少し味がついてきた」とはやる。結局秋に、大きい木に三十を超えるほど、
小さい木で二つほどとれた。遠方からの客人に、奇跡のリンゴというふれこみで勧めたが、
お礼の葉書に「なつかしい味」というほめ言葉。つまるところ、十分大きくないし甘みも
足りなかったのである。七月から八月の早は成熟を妨げたと思う。袋をはずしたのに、あ
まり赤くもならなかった。こうして、ナシやリンゴのように果物の中でも高級なのは、店
で売られほど立派な実を収穫するのにどれほど人手がかかっているかを教えられた。農村
で普通に見られる果樹がカキやクリやピワだという理由を納得した。

さて、園丁が囲炉裏端でもないところで一年を回顧して長く語るのは、興ざめである。
年報と題しているのだから、あとは収穫を書きとめよう。ブドウが六〜七房、ただし一房
の中にも青い玉の残ったもの。イチジクは強い木だと思っていたら、一年早く植えた方は

カミキリムシが実ではないけれど幹を食べている。それでも、二株からけっこうな数が取れた。西条ガキは二個。大きく育つたのを、台風の来たときそのまま置いていたら、その二つの枝が折れた。まだ三年目(↑)の幼木なのに、かわいそうなことをした。成長が遅れるだろう。甘柿の方は花だけ。グミも花だけだったので、応援のため夏になつてもう一株足した。花を咲かせた柑橘類で、実をつけたのはミカンが一個。それも、夏の早で表面が茶色に焼けたので、小さな木の樹勢を守るために摘果した。十年近く前に植えたレモンだけは四個もちこたえた。ユニークさを主張し、先端の突起が目立たず丸い。サクランボは六個。というわけで、園丁の植えた果樹の収穫は微々たるもの。両親の形見のビワとクリだけが、例年近く収穫できた。しかし、ビワの甘みは足りず、たくさん生ったクリは、夏の早で早く落ち始めた。残った実は小さくて、十分大きくなつたのはわずか。老いたウメは、カイガラムシを養うのに精いっぱい、梅干しではなく梅酒づくりを勧告した。

水やりの苦勞を強調するのは味気ないのでもうくりかえさないが、野菜も果樹も成長が順調ではなかった。今年もまた異常な天候だった、と園丁は実感する。地球温暖化は、事実として進んでいるようだ。単に一老夫の苦勞話ではなく、生き物とヒトの直面している重大な問題である。天を仰ぎ見て思う、手をこまねいていいのだろうか。

もちろん、園丁の手抜きはたくさんあったと思う。来季は、冬場から世話をして果樹や野菜に十分な食糧を提供し、自然の営みに参加することをもっと喜びたい。たとえ言葉に結晶化しないとしても、歓びの詩が心中に芽生えたら、以て瞑すべし。

こういう年報を記録することを思いついたのは、第六話を書きながらのことである。だがその後、H・D・ソローの『森の生活』を手にしてしまった。それを読んだあとに、拙く自然とかかわっている生活を記述するのはためらわれる。しかし、軽はずみな園丁は、思い立ったことをやめることができなかつた。濁が埋まつてできた広くない荒地で、わずかの野菜や果樹を育てている海辺の生活の痕跡を残したいと思う。

まだ大半の人々が自分で生産する食べ物で生きていた十九世紀に、森に入り他人と違う生活の経済が成り立つことを示すことは、ソローにとつて必要な一章であつた。現代では、家庭菜園をもつ誰もが言うように、菜園の収支はむしろ持ち出しである。自分の畑仕事を賃金に換算すれば、ますますそうである。けれども老夫があえて言えば、「仕事」を労働賃金で算定するのは、人間の疎外のはじまりである。畑仕事は、雲を耕し月を釣る修行に準ずる行ないなのである。むしろ収入に計上しなければならぬ。その上、健康維持のための運動に匹敵する。だから、貨幣による経済収支はこの年報に記さない。

ソローばりの文章にしようとしてみたが、成功しない。彼の人は、さまざまの書物の言葉をちりばめて、たいへん巧みな文体をつくりだしている。十九世紀のハーバード大学で数多くの古典を読んだうえ修辭学を学んだ人に、修辭学にとんと縁のない日本人がかなうはずがない。『市民の反抗』を書いたソローは、自主独立の精神が強く新しいことに挑戦する、典型的なニューイングランド人の一人である。森の生活にしろ、海辺の生活にしろ、心意気の点でも、集団的な行動規範に縛られた日本の老夫は及ばない。

しかし、自然と暮らす意味を探ったソローを真似るとすれば、園丁は、たくさんすることに注意を向けて考えたその姿勢をこそ学ばなければならない。最も重要なことは、孤独な森の生活の中で、若いソローがあれほど深く宇宙や自然と人間のことを考えたということである。海辺の生活でも、内海を見つめ、彼岸に相對し、天を仰いで觀想することができよう。そのような高邁な精神を培い、思索を助ける場所が果菜園荒地である。

年報に一つ書き落した果樹がある。先代からの花ユズは今年もたわわに実をつけた。今宵の湯船に一緒につきり、一年が大過なく過ぎたことに感謝しよう。